

第9回原子力委員会臨時会議議事録

1. 日 時 2010年2月25日(木) 13:30～14:00

2. 場 所 中央合同庁舎4号館 10階 1015会議室

3. 出席者 原子力委員会

鈴木委員長代理、秋庭委員、大庭委員、尾本委員

文部科学省研究開発局原子力研究開発課

板倉課長

内閣府

中村参事官、瀧上企画官、藤原参事官補佐

4. 議 題

(1) 独立行政法人日本原子力研究開発機構の中期目標について(諮問) (文部科学省)

(2) その他

5. 配付資料

(1-1) 独立行政法人日本原子力研究開発機構が達成すべき業務運営に関する目標(中期目標)について(諮問)

(1-2) 独立行政法人日本原子力研究開発機構が達成すべき業務運営に関する目標(中期目標)(案)

(1-3) 独立行政法人日本原子力研究開発機構の現中期目標と次期中期目標案の対照表

(1-4) 独立行政法人日本原子力研究開発機構の次期中期目標策定に係る原子力委員会の見解への対応について

6. 審議事項

(鈴木委員長代理)では、第9回の原子力委員会を始めたいと思います。

今日の議題は、1つ目が独立行政法人日本原子力研究開発機構の中期目標についてで、文部科学省から諮問がありましたので、ご説明をいただきます。2つ目がその他です。よろし

いでしょうか。

それでは、1つ目の議題からお願いいたします。

(1) 独立行政法人日本原子力研究開発機構の中期目標について（諮問）（文部科学省）

（中村参事官）では、1つ目の議題でございます。

独立行政法人日本原子力研究開発機構の中期目標でございますけれども、お手元の資料1にありますように、本日付で諮問がございました。これにつきまして、文部科学省研究開発局原子力研究開発課の板倉課長からご説明をいただきます。お願いします。

（板倉課長）ご説明をさせていただきます。

中期目標の諮問でございますが、日本原子力研究開発機構につきましては、独立行政法人通則法に基づきまして中期目標を5年に一度定めることになっており、資料1-1のとおり、独立行政法人日本原子力研究開発機構法第25条の規定に基づきまして、本日、諮問させていただいたところでございます。

中期目標自体につきましては資料1-2に、新旧対照表につきましては資料1-3のとおりでございます。資料が大部にわたりますので、先般、原子力委員会よりいただいた中期目標に対する見解の反映状況につきましてまとめた資料1-4に基づいてご説明をさせていただきますと思います。

次期中期目標でございますが、原子力機構は原子力政策大綱に基づいて事業を実施していくこととしておりますので、高速増殖炉サイクルの推進などの大枠につきましては、大きな変更もなく、ぶれずに推進をしていくという方針としております。それに加えて、原子力委員会からの見解、あるいは総務省の政策評価・独立行政法人評価委員会の勧告などを反映して、この目標を策定しております。

それでは、中身についてご説明いたします。まず、いただいた見解の最初の項目、構成員の士気の向上、それから定量的な目標をできるだけ掲げることということにつきましては、今回、前文を設けることで原子力機構全体として目指すべき方向性を明記することといたしました。また、数値目標につきましても、例えば「もんじゅ」の運転再開後の性能試験の計画の年限を具体的に記入するなど、現行より詳細にしているところでございます。

2点目は、原子力機構の運営に当たっては、しっかりとしたトップマネジメントを発揮し、PDCAサイクルを回すべきというところでございます。こちらにつきましても、理事長の

リーダーシップに加え、経営層の行うマネジメントや各研究所におけるマネジメント等の重層構造をもとにしたPDCAサイクルを回すことを記載しているところでございます。

3点目は、原子力機構はイノベーション・エコシステムの中核にふさわしい知の拠点としての専門性のある活動を行うようにということでございます。そちらにつきましては、高速増殖炉等4つの大きなプロジェクトもありますが、それだけでなく基礎・基盤研究も包括して研究開発を行っていくということ。また、技術の高度化に加えまして、産学官の連携を行うということ。さらに、幅広い専門分野の研究者・技術者の知識の蓄積を生かした研究開発の推進を行うことなども記載しているところでございます。

4点目は、大型施設の運営を委ねられるという意味合いを十分認識しなければいけないというところでございます。こちらにつきましては、J-PARCにつきまして、一昨年になりますが、特定先端大型研究施設として共用の促進を図るということが法的に定められ、その共用の促進についても明記をしているところでございます。

5点目は、原子力機構は安全対策や、核物質防護、核不拡散の模範となるべきであるというご指摘につきましても、当然のご指摘と考えており、原子力の研究開発利用を進める上で、安全確保や核不拡散等の重要な課題につきましても明記しているところでございます。

6点目の高速増殖炉サイクルにつきましては、昨年8月に高速増殖炉・サイクル技術に関して見解をいただいておりますが、その見解に基づきまして、ユーザーである電気事業者なども含めたスパイラルアプローチを行っていくということ、またこのプロジェクトに関するマネジメントをしっかりと行っていくことについて記載をしているところでございます。

7点目は、放射性廃棄物の処理・処分技術については、一般社会でも重要なリデュース・リユース・リサイクル技術の開発という側面もあるので、しっかりとやるようにというご指摘でございます。これはもちろん廃棄物の処理・処分は発生者責任として、原子力機構での廃止措置、それから処理・処分技術、さらに民間の研究所から出る埋設処分の実施主体にもなっておりますので、しっかりと取り組んでいく旨を記載しているところでございます。

8点目は、外部機関との協力については、達成すべきアウトカムを明らかにして着実に進めるべきというご指摘もいただいております。産学官の連携だけでなく、国際的な協力につきましてもしっかりと対応していきたいと考えております。

9点目の新興国や国際機関との協力につきましても、協力活動を通じた国際貢献を実施していく旨を明記しているところでございます。

10点目は、人材につきまして、若年層の充実とシニア人材の活用を図り、知識・技能の伝承を適切に実施するというご指摘でございます。こちらにつきましても、原子力機構において、より一層人材マネジメントをしっかりと行い、若手職員にしっかりと技術が継承できるようにということを目指しているところでございます。

11点目は、原子力は多額の国費を投入して行われることから、その意義等についての説明責任をしっかりと果たすべきであるとのことご指摘でございます。こちら也非常に重要な課題でございますので、引き続き、この取組を実施していくこととしているところでございます。

最後の12点目でございますが、第二再処理工場の議論、あるいは高速増殖炉サイクルシステムの評価を踏まえた目標の見直しなどに柔軟に対応していくべきというご指摘でございます。当然のことながら、基本となる政策が変われば、この目標も必要な変更を行うこととなると考えております。

以上のように、いただきました見解の反映をいたしまして、目標を定めたところでございます。よろしくご検討のほど、お願いいたします。

(鈴木委員長代理) ありがとうございます。

それでは、各委員方、ご質問をお願いします。

大庭委員、どうぞ。

(大庭委員) 色々と作業いただき、お疲れさまでした。大変だったと思います。

我々の主要な意見ということで見解を述べさせていただいたと思うんですが、ここにある原子力委員会の見解への対応という資料で幾つか読み上げなさったんですけども、それを反映してどのように変わったのかというのが良く分かりません。

というのは、対照表を見せていただいたんですけども、ほとんど文言も変わっていないし、幾つかの箇所を統合したところで、項目は違ってはおりますけれども、内容自体が変わったという印象は持てない。どういうところで原子力委員会の答申を踏まえて特段の対応を組み入れたのかということについて、少し事例を出してお話しいただければと思います。

(板倉課長) 個別に色々あるかと思いますが、いただいた見解につきましては、理念として、今回より記載することとした前文に反映させたところでございます。網羅的なものではありませんが、例えば産業界との連携でしっかりとアウトカムを考えろということにつきましては、前文の下から9行目のところで、原子力機構が産業界、大学及び地域との連携によって、新たな原子力利用に係る産業の創出を目指した研究にも取り組むというような考え方を加えております。

(鈴木委員長代理) 資料 1－3 を用意していただいていますね。今の大庭委員のご指摘もあったので、時間もまだありますから、資料 1－3 で一番大きく変更したところをご説明いただければよろしいのではないのでしょうか。確かに前文は新しく入ったということですよね。

(板倉課長) ほかに、リーダーシップについては、新旧対照表の 16 ページをご覧ください。従来では、理事長のリーダーシップにより、事業の選択と資源の集中により効率的な業務運営を行うとしておりました。マネジメントの面は非常に重要だと思っておりますので、次期中期目標では、まず理事長のリーダーシップはもちろんです、きちんと機構全体を俯瞰できるように理事長の経営を支える経営機能を強化すべきと考えております。やはり、サポート体制が必要で、個人の能力のみでは難しいということもございます。

それに加えて、研究開発を効率的かつ計画的に進めるために、責任の所在の明確化、研究開発拠点・部門間の有機的連携というところにつきましては、まず原子力機構全体としてのマネジメントだけでなく、開発拠点としてのマネジメントもあります。それについても責任の所在を明らかにして全体のマネジメントに反映するという重層的なマネジメントを行うべきというように反映しております。

順番が前後いたしました、若手職員の育成につきましては、現行計画ではあまり光を当てておりませんでした、同じく 16 ページの「(3) 人材・知識マネジメントの強化」におきまして、原子力機構の研究開発成果の若手研究者・技術者への知識・技能の継承や能力向上に係る取組を計画的に、組織的に実施していくことが必要と考えております。やはり、オン・ザ・ジョブ・トレーニングだけだと、うまくいかない点もございますので、しっかりと組織的にやっていくということが必要でございます。

(大庭委員) 今の話は、原子力委員会の見解のどこを反映させたということでしょうか。

(板倉課長) マネジメントにつきましては、見解の 2 番にトップマネジメントを行いなさいということをご指摘いただいております。このご指摘は非常に当を得ておりまして、きちんと計画を立てる作業につきましては、作業の設計者や実行者をきちんとマネジメントすることが重要と思っております。文書上では簡潔に見えているかもしれませんが、理事長のリーダーシップ、それから研究開発拠点・部門を有機的に連携させてマネジメントするという記述として反映させていただいております。

また、若手職員の育成につきましては、見解の 10 番目でのご指摘をいただいておりますので、次期中期目標におきまして、技術の伝承ということをしっかりと記載しているところでございます。

(大庭委員) せっかく原子力委員会の役割の一つにこれの諮問答申をするということがありますので、もう少しゆっくりとじっくりとお話しできる機会があれば良かったのにと感じました。これは私の感想です。

(板倉課長) もう少し詳細な資料を準備すべきでした。

(大庭委員) いえいえ、資料の良し悪しとかそういう意味ではなくて。

(鈴木委員長代理) 議論のことですね。

(大庭委員) はい、そうです。ここに至るまでの議論の話です。

(鈴木委員長代理) 時間的にきつかったですね。

他にご質問はないですか。秋庭委員、どうぞ。

(秋庭委員) 今と同じような点ですけども、私たちも見解をまとめることに時間をかけて一生懸命やってまいりましたので、この意味を酌んで、ぜひ良い方向に持っていただきたいと思います。この中でも、「もんじゅ」が動き出すという大きな動きがあります。このことについても見解の6番で高速増殖炉について書いておりまして、かなり気合の入ったところですが、でも、いただいた次期目標案ではさらりと書いてあるような気がします。これは、見解の内容を分かっていてこうやっていただいているのでしょうか。

(板倉課長) いただきました見解を私どもで受けとめさせていただきましたが、この目標を受けまして、原子力機構が中期計画を策定し、事業を行っていくことになります。したがって、事業を行うにあたって認識していかなければいけない理念と、その計画に基づきまして評価をしていくという、国と独法との間のPDCAサイクルがございますので、中期目標と中期計画の記載を分けて考えさせていただきました。このような理念的なことと、実際に計画を実行するにあたって踏まえなければいけないことは、事業を実施するに当たって、私ども、あるいは原子力機構もこの趣旨を十分理解して進めなければいけないと考えてございます。

中期計画の形といたしましては、理念を評価するということが難しいところがございますので、事業の評価を行いやすい形に書き加えさせていただいたという面がございます。

(秋庭委員) 先程、大庭委員からもありましたように、もう少し多くのコミュニケーションが図られると良かったと思います。原子力委員会としては方向性を考えていくという大きな役割がありますので、今後具体的に実行するときに、また我々の意見も踏まえていただきたいと思います。ぜひよろしくお願いいたします。

(鈴木委員長代理) よろしいですか。

尾本委員、どうぞ。

(尾本委員) 今、秋庭委員がおっしゃったように、原子力委員会の指摘した事項が今後具体的な計画を作っていく中で、その考え方を反映されていくことを期待します。

私は原子力委員会が2月9日に出しましたコメント事項の中で、特に3番と6番が重要だと思っています。その6番の中で、イノベーション・エコシステムや社会との関係について述べてありますが、ここでイノベーション・エコシステムというややこしい言葉を使っているのは、イノベーションを実現するプロセスは生態系のように柔軟に、他とのインターフェースを考えながら柔軟にやっていきたいと思いますということだと思います。その点で、社会との関係というのが、資料1-2の7番の項目、産官学との連携の強化と社会からの要請に対応するための活動のところで社会という言葉が出てきて、社会に還元する、あるいは立地地域の産業界との協力、あるいは立地地域の信頼の確保、広聴・広報、こういったところが出てきます。これは私の見解ですが、特にJAEAがやっている高速炉とサイクル、これを日本だけではなく世界全体で、持つ便益を最大限にしていくためにはどのような社会システムがあると良いのか、制度的な社会システムがあると良いのか、あるいは技術の社会的な受容性という点で、技術の側から歩み寄ると言うとなんか変な言い方かもしれませんが、技術の側からもどうやったらその技術が世の中にうまく受け入れられていくかといったことを考えていく余地があると思うんですね。

そういう点について、残念ながら今の案では触れられていません。私どもの申し上げた見解の3番、6番の中にはそういう意味合いも含まれていると思いますので、今後はぜひそこを踏まえてよろしくお願いします。

以上です。

(鈴木委員長代理) よろしいですか。

他にご意見がなければ、諮問をお受けしたということで、こちらのほうで審議して答申をお渡しするということになると思います。

今、委員方からご指摘があった点については私も全く同感です。趣旨を踏まえていくというお言葉をいただいていますので、9日の見解の趣旨を踏まえて作っていただいた目標、それから、今度は計画を作っていただくということですので、特に見解の3番と6番という話が出ましたけれども、今後イノベーションを生み出す機構として頑張っていただきたいというのが我々原子力委員会の共通した願いだと思います。

今後、我々としても、政策大綱の話もありますけれども、色々な見直しをしていかなければいけないときに、これももちろん大事なフレームワークですけれども、それに柔軟に対応

していただきたい。今、尾本委員からご指摘がありましたように、社会との関係で柔軟に反映していただくということをご理解いただければと思います。以上、私からのコメントです。よろしくお願いします。

では、今日はこれで結構です。ありがとうございました。

(2) その他

(鈴木委員長代理) では、他に議題はありますか。

(中村参事官) 事務局では特にございません。

(鈴木委員長代理) 委員方で何か。では、次回の予定を。

(中村参事官) 次回のご案内をいたします。

次回、第10回の原子力委員会は臨時会を予定してございます。明日、2月26日金曜日の9時45分からこの場所で予定をしてございます。

(鈴木委員長代理) 委員方の予定は大丈夫ですか。よろしくお願いいたします。

では、ありがとうございました。今日はこれで終わります。

—了—